

若手アカデミーの動向

第1回アジア若手アカデミー会合参加報告

住井英二郎

2016年12月14日～16日にバンコク（タイ）で開かれた、第1回アジア若手アカデミー会合（The 1st Asian National Young Academy Meeting）に参加したので報告する。

本会合は、2014年2月と昨年3月に日本学術会議若手アカデミー委員会（当時）および若手アカデミーの主催により東京で開かれた若手科学者アジア会議に続き、グローバルヤングアカデミー（GYA）の協力を得て企画・開催された。参加者はアジア各国の若手アカデミーおよびGYA関係者を中心とする29名（23か国）であった。

14日夜のGYA幹事団およびタイ側関係者を交えたレセプションの後、15日はタイ国立科学技術開発庁（NSTDA）を会場とし、ピチュート科学技術大臣（タイ）によるご挨拶と、原山優子総合科学技術・イノベーション会議議員（日本）による基調講演の後、ASEAN内外の人材移動や、日本を含むアジア各国の若手アカデミーの立ち上げおよび活動に関する多数の発表と活発なディスカッションが終日にわたり行われた。16日午前は参加者らの滞在するホテルの会議室に会場を移し、タイの若手研究者らも交え、アジア各国の若手アカデミー間の連携や、科学コミュニケーションに関して、ワークショップ形式を含む密な議論・発表が行われた。紙面の都合上、詳細は割愛するが、アジア各国の経済発展にともない、若手研究者を取り巻く学術研究環境にも力強いエネルギーが感じられ、韓国で新たな若手アカデミーが発足する予定も報告された（次記事『日韓アカデミー若手科学者会合の報告』参照）。なお、全体を通して、GYA元メンバー（alumni）の一人である駒井章治氏（奈良先端科学技術大学院大学准教授）が運営ボランティアとして多大な協力をされた。

次回のアジア若手アカデミー会合は来年2月11日から13日まで、エルサレム（イスラエル）で予定されている。なお、アジア若手アカデミー会合やGYAとは別に、世界各国の若手アカデミーの会合（Worldwide Meeting of Young Academies）も今年7月にヨハネスブルク（南アフリカ共和国）で開かれ、日本からの参加も要請されたが、残念ながら都合のつく若手アカデミーメンバーがいなかった。（特に若手の）研究者の



ピチュート大臣と原山議員（中央）

多忙が問題の中、日本の若手アカデミーにとっても課題と思われる。

●プロフィール

住井英二郎（すみい えいじろう）

東北大学大学院情報科学研究科教授、日本学術会議若手アカデミー幹事

専門：計算機科学

日韓アカデミー若手科学者会合の報告

新福洋子、狩野光伸

2017年3月15日～16日の2日間、韓国科学技術アカデミー（Korean Academy of Science and Technology：KAST）に若手アカデミー（Y-KAST）が発足することを機に、二国の若手メンバー同士のワークショップが企画され、日本学術会議若手アカデミー（Young Academy of Japan：YAJ）から5名（狩野光伸、北村友人、住井英二郎、高瀬堅吉、新福洋子）が韓国、ソウルに派遣された。日本学術会議は、2014年11月に、大西会長が韓国を訪問した際に、韓国科学技術アカデミーと二国間学術交流に関する了解覚書を取り交わした。その後、日本学術会議は、様々な機会をとらえて韓国科学技術アカデミーとの学術交流を深めている。このような中、韓国において若手アカデミーの立ち上げが予定されていることから、本会合は時宜を得て、今回実現するに至った。韓国科学技術アカデミーからは、メンバー9名（うち若手メンバー7名）、職員3名が参加した。

韓国に到着後、韓国科学技術アカデミーに移動し、ワークショップを開催した。初日のワークショップにおいて、Myung Chul Lee氏（KAST代表）とYong Ho Park氏（Y-KASTチーフコーディネーター／KASTフェロー）から開会の挨拶があった。

日本学術会議若手アカデミーメンバーは、当該若手アカデミーを紹介し、さらに、各学問領域の枠組みを越えたテーマで発表を行った。狩野は、“Thoughts on meaning of the “academy” activity” というタイトルで、日本学術会議若手アカデミーの紹介、アカデミーにおける若手研究者の活動の意義について発表した。北村氏は、“Roles of Higher Education for Realizing Sustainable Development Goals (SDGs)” というタイトルで、持続可能な開発目標を実現するための高等教育制度の役割について発表した。住井氏は、“Experiences in the Young Academy of Japan” というタイトルで、日本学術会議若手アカデミーの紹介、Global Young Academyとの協調活動について発表した。新福は、“Public Private Partnership to promote globalization of young researchers: An experience of JICA collaboration” というタイトルで、国際協力機構（JICA）と大学との連携の下で行われているタンザニアへの大学院生派遣活動について紹介した。高瀬氏は、“Research evaluation disparities: possibly influenced by research field and generation?” というタイトルで、研究領域間または世代間で起こる研究評価の違いについて

紹介した。

次に、韓国科学技術アカデミーメンバーが、各自が取り組む研究分野の発表を行った。So-Jung Park氏（梨花女子大学）は“Smart Responsive Nanomaterials”というタイトルで、DNA鎖交換反応を利用した形状可変フィルムの研究について発表した。Jang Wook Choi氏（KAST）は、“Future Energy Storage”というタイトルで、地球のエネルギー問題を紹介し、



最先端電池技術について発表した。Hyongbum Kim氏（延世大学）は、“Genome Editing as Future Medicines”というタイトルで、遺伝子改変技術の歴史、ゲノム編集技術について概論し、ゲノム編集を用いた最先端研究について紹介した。これらの話題提供ののち、皆で意見交換を行った。

ディスカッションでは、今後Y-KASTのメンバーを増員していくにあたり、Y-KASTのメンバーになるメリットをどう伝えたら良いか、意義のある団体にしていくにはどうしたら良いか、という視点から、考え方を尋ねられた。これに対して、参加意義の社会的なメリットとしては、社会を変えていくために声を上げる代表となること、外国の研究者と近い立場で関わることから促進される科学の発展、個々のメリットとして、若いうちからこのような交流に参加することで、外国の研究者とのネットワークや学術的交流スキルが将来管理的な立場になった際にも役立つこと、何かのポストの選抜時に他の候補者から業績以外の部分で抜きん出ることができること、といった可能性が出された。また質の高い研究をしている研究者をイベント時に表彰して、社会的に周知するという可能性も挙げた。

今回の会合では、日本学術会議若手アカデミーの活動を紹介し、さらに、各学問領域の枠組みを越えたテーマで発表を行うことで、韓国若手アカデミーの立ち上げに際して有益な情報を提供することができた。また、ディスカッションを通じて、日韓の若手研究者の現状と課題、展望を共有し、議論を深めることに成功し、領域を超えた横断的な課題を具体的に報告しあう形で、意義の見える交流を続けることに合意した。

極めて短期間の滞在だったが、発表、それに基づく意見交換からさまざまな学術的刺激を受け、日本・韓国の若手の連携に向けて、一気に交流が進んだことは有益だった。来年度以降、今度は韓国科学技術アカデミーのメンバーを日本に招聘して、会合を開催することで互いに合意した。今回の出張に尽力して頂いた日本学術会議には心より感謝申し上げる次第である。

●プロフィール

新福洋子（しんぶく ようこ）
聖路加国際大学ウィメンズヘルス・助産学助教
専門：看護学

狩野光伸（かの みつのぶ）
岡山大学副理事（研究担当）・大学院医歯薬学総合研究科教授
専門：医学

Global Young Academy 年次総会参加報告

岩崎 渉

去る2017年5月16日～19日、Global Young Academy第7回年次総会がスコットランド（英国）アビモアにて開催された。日本学術会議若手アカデミーは我が国における若手アカデミーとして多岐にわたる活動を行っているが、Global Young Academyはその国際版にあたり、各国の若手アカデミーに所属する若手科学者（人文・社会科学の研究者を含む）をはじめ、様々な学術領域の第一線で活躍する世界各国のメンバーによって構成されている。今回の年次総会には約40か国から約100名の参加者が集まり、日本学術会議若手アカデミーからは筆者のほか住井英二郎氏および岸村顕広氏が、また、元メンバーとして奈良先端科学技術大学院大学の駒井章治氏が参加した。

年次総会の第一の柱は、学術と社会の間に存在する様々なトピックに関する議論であった。今回は“Social Justice in a Rapidly Changing World”が大きなテーマとして設定され、ジェンダー、マイノリティ、テクノロジーと貧富の格差、健康格差、ベーシックインカム、地域に根づく文化から生じる諸問題など、本テーマに関する幅広いトピックに関する発表および質疑応答が行われた。また、国際科学会議（International Council for Science）の会長であるGordon McBean氏よりSustainable Development Goalsに関連した活動の紹介が行われるなど、ゲストからの発表も多数行われた。さらには、科学外交、科学教育、オープンサイエンスなど、学術と社会の間にある各問題についてワーキンググループに分かれての議論が行われたほか、オンライン教育、参加型民主主義、公衆衛生などをテーマとしたパネルディスカッションが行われた。議論はGlobal Young Academyの特徴である学問分野の多様性、幅広い国際性、そして若手ならではの具体的な問題意識を踏まえた、大変活発かつ豊かなものであった。また興味深い取り組みとして、Global Young Academyのメンバーがホストとなり、近隣の高校生を受け入れての科学技術に関するワークショップも行われた。



会合の様子

第二の柱はGlobal Young Academyのメンバーによる二部構成の研究発表であった。第一部では今回の総会のメインテーマ“Social Justice”に関連する発表が、第二部ではその他の幅広い内容に関連する発表が行われた。これらの研究発表もまた、Global Young Academyの特徴を反映し、多様な学問分野の最先端の内容を魅力的に伝えるものであった。メンバーによる投票によって第一部、第



新メンバーに選出された岸村氏（左）と筆者（右）

二部の発表から1件ずつBest Presentation Awardが選ばれ、光栄なことに、筆者は第二部の同Awardを受賞した。

第三の柱はGlobal Young Academyの運営に関する活動であった。年次総会は新メンバーの就任式とメンバー間の共同作業形式のワークショップによって始まり、Global Young Academy全体と各ワーキンググループの活動報告・紹介、そして規約改正や活動方針に関する本質的な議論が行われた。また、次期役員候補者によるプレゼンテーションと選挙が行われ、英国のMoritz Riede氏と南アフリカ共和国のTolu Oni氏が次期共同議長に選出された。年次総会の終盤には、今年度で退任となるメンバーの離任式が行われた。

上記のように、Global Young Academy年次総会は大変活発で、実りあるものであった。一方で、コーヒブレイク等において各国からの参加者とざっくばらんに行った本音の意見交換からは、若手アカデミー活動の本質的な難しさも改めて感じられた。若手科学者の本分は、やはり、良い研究成果を挙げることであろう。各メンバーはそれを前提とした上で、こうした若手アカデミー活動を形と意味のあるアウトプットまで繋げ、かつ、自身のためにも効果的に活かしていく、という制約条件を満たす解を見つけていかなければならない。Global Young Academyは、そのようなモデルケースをより多く蓄積していくことが必要な時期に差し掛かっているようであった。

次回の第8回Global Young Academy年次総会は2018年5月にタイのパタヤで開催される予定である。

●プロフィール

岩崎 渉（いわさき わたる）
東京大学大学院理学系研究科准教授
専門：バイオインフォマティクス

第2回若手科学者サミット 開催報告

高瀬堅吉

2017年6月2日、第2回若手科学者サミットが日本学術会議講堂にて開催された。開会に先立ち、宇南山卓氏(若手アカデミー若手科学者ネットワーク分科会委員長・一橋大学)より開会の辞が述べられた。その後、「第1部：若手研究者による研究報告」において、榎景子氏(神戸大学大学院人間発達環境学研究科・研究員、日本教育行政学会若手ネットワーク)、湯本敦史氏(芝浦工業大学・准教授、日本溶射学会若手の会)、加藤豪司氏(東京海洋大学・助教、日本水産学会若手の会)、木下武也氏(国立研究開発法人海洋研究開発機構・研究員、日本気象学会人材育成・男女共同参画委員会)、北島正章氏(北海道大学大学院工学研究院環境創生工学部門・助教、Japan-YWP (Young Water Professionals)) から、各分野の動向と自身の研究について発表があった。

15時から「第2部：ポスターセッション」がロビーにて開催され、活発な意見交換が行われた。以下に参加団体を記す。

- 1 日本基礎心理学会若手研究者特別委員会
- 2 資源・素材若手ネットワーキング
- 3 日本放射光学会若手部会
- 4 日本産業衛生学会生涯教育委員会若手研究者の会
- 5 疫学の未来を語る若手の会
- 6 化学工学会九州支部若手エンジニアリング連絡会
- 7 日本心理学会若手の会
- 8 ビーム物理研究会・若手の会
- 9 日本溶射学会若手の会
- 10 溶接学会若手会員の会
- 11 日本気象学会人材育成・男女共同参画委員会、気象気候若手研究者交流会
- 12 日本サンゴ礁学会若手の会
- 13 水産学若手の会(日本水産学会)
- 14 Japan-YWP
- 15 次世代医工学研究会
- 16 日本顔学会若手交流会



ポスターセッションでの活発な意見交換

16時20分から「第3部：パネルディスカッション」が「若手研究者と研究費」というテーマで、講

堂で開催された。パネリストとして、池田一郎氏（文部科学省研究振興局振興企画課・課長補佐）、奥篤史氏（文部科学省大臣官房総務課・企画官・副長）、斉藤卓也氏（文部科学省研究振興局基礎研究推進室・室長）、佐々木満氏（熊本大学パルスパワー科学研究所／大学院先端科学研究部・准教授）、樋口富彦氏（東京大学大気海洋研究所・特任研究員）、平田佐智子氏（若手アカデミーメンバー・株式会社アイデアラボ・研究員）、井藤彰氏（若手アカデミー若手科学者ネットワーク分科会副委員長・九州大学・准教授）が登壇した。研究費は、若手研究者を取り巻く研究環境の中でも重要視されており、その分配、運用について積極的な議論が交わされた。話題は、研究費使用に関する各組織独自のルール、科研費の区分変更、研究費の不正使用など多岐にわたり、研究費使用のルールについては文部科学省の方も疑問視されるような各組織独自のルールが話題にあがった。研究費使用に関して、研究者の事務作業を増やすだけの組織独自のルールは、研究者側から会計検査院（<https://www.jbaudit.go.jp/form/information/index.html>）に情報提供可能であることが周知され、一つの改善策として提起された。また、科研費の区分変更については、その周知方法が話題にあがり、文部科学省から配信される情報が現場の研究者に届きづらい現状が共有された。研究費の不正使用については、これにより社会全体の研究者への信用が失墜してしまうことが改めて認識された。また、使用に関するルールは組織独自のものなので、研究者・事務・執行部が連携を密にすることで、状況が改善するのではないかという結論を得た。若手科学者サミットは18時に閉会となり、19時頃より近隣において懇親会が開催された。活発な議論は懇親会でも続き、若手研究者の躍動が感じられるイベントとなった。



閉会後に撮影した全体写真

●プロフィール

高瀬堅吉（たかせ けんきち）
自治医科大学大学院医学研究科教授
専門：臨床発達心理学／発達生物心理学